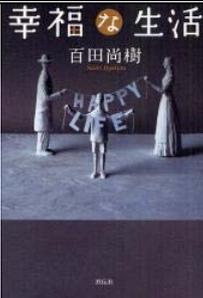
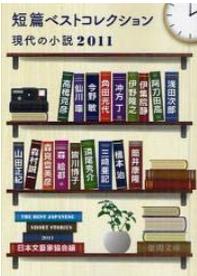
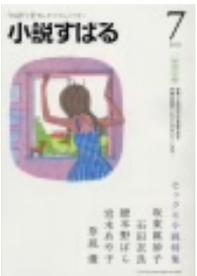
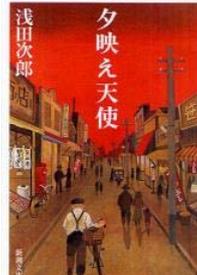


001 健

	読書日 2011年	タイトル	著者 出版社	表紙	コメント	評価
1	0515- 0519	源内なかま講	高橋克彦 文藝春秋 1,700円		だまし絵シリーズの5作目。今回は源内を中心に蘭陽、春朗(北斎)の三人が幻となった「源内焼」二万両のお宝を探しに源内の故郷、讃岐に出かける。ストーリーはいつも通りの厄介ごと、怪現象に出くわし解決してゆく連作短編。新たに十返舎一九も加わりだんだん賑やかなシリーズになってきたがちょっと緊張感が無くなってきたかなあ。平賀源内は好きな偉人の一人なので源内の名が入っていると取りあえず読んでしまう。	
2	0520- 0521	パラレルワールド・ ラブストーリー	東野圭吾 講談社文庫 780円 (古250円)		並走する電車の中にいつも見かける女性に想いを寄せる主人公。ある日友人が恋人だと紹介したのがまさしくその彼女だった。彼女を奪うため主人公がした事とは。気が付くと何故か彼女は自分の妻になっていた。友情を取るか恋愛をとるか。自分の過去に疑問を持ち始めた主人公が「本当の過去」を取り戻そうと記憶と真実の狭間を辿る。恋愛に関する嫉妬、裏切りなど感情のもつれが生々しい。	
3	0523- 0524	虹を操る少年	東野圭吾 講談社文庫 650円 (古250円)		言葉・音楽・文章などの伝達手段同様、光や色でメッセージを大多数の人に伝え、行動に影響を与え手を開発した天才少年。それがいざれ権力者の脅威となりうることを少年はすでに予見していた。バンドに熱狂する少年たちを参考に思いついたそうで少年向けに書くつもりだったのを大人用に練り直して書いたとの著者のコメント。	
4	0525- 0527	殺人現場は雲の上	東野圭吾 光文社文庫 460円 (古250円)		新日本航空のステューワデス、エー子とビー子。同期入社でルームメイトというなおよしコンビであるがかたや慎重・才色兼備、かたや大胆・お調子者という凸凹コンビ。機内で起こった不可解な事件、搭乗者が起こす珍妙な事件を解決するコミカル・ミステリーの連作短編集。昨今はCA(キャビン・アテンダント)と呼ぶようで何だかようわからん。	
5	0530- 0603	黒祠の島	小野不由美 新潮文庫 700円 (古100円)		ステイブン・キングの趣を持つ作品で古典的なストーリー。明治政府の取った祭政一致政策による信仰の統一を免れたものを黒祠(こくし)と呼ぶ。夜叉島はまさしくよそ者を受け付けぬ信仰のはびこる黒祠の島だった。失踪した知人を追ってこの島に辿り着いた主人公は猟奇殺人に巻き込まれ様々な妨害に遭いながら事件の真相を解明する。	

6	0603-0605	幸福な生活	百田尚樹 祥伝社 1,575円		著者は「探偵ナイトスクープ」の放送作家。「永遠の0(ゼロ)」が面白かったので購入したがジャンルはともかく作品が軽くてがっかり。ショートショートというのには長く短編というには短い。コクのある作品を期待したのが間違い。ひまつぶしにはよいが…。そもそもショートショートでラストが予測できちゃうのはダメでしょう。
7	0606-0608	真夏の方程式	東野圭吾 文藝春秋社 1,700円		前回の読書リストにあるように週刊文春で一度読んでいるが再読の利く傑作。いつも思うのだが雑誌掲載時は挿絵入りだが単行本になるときは小説本なので無くなるのが淋しい。気に入った挿絵の時は尚更だが増刷時のの印税など考えるといろいろ手続きが面倒になるからかも知れない。
8	0606-0608	作家生活25周年 特別企画 東野圭吾 公式ガイド	文藝春秋社 0円 無料配布		講談社の「麒麟の翼」の時は手にいれそこなったので今回の「真夏の方程式」発売にあたっては、エキナカの本屋が早朝から開店しているので久しぶりに通勤時間帯に東京駅まで行ってゲット。全作品に著者のコメント付きなのは同じだが自社発行の「真夏の方程式」の部分は独自解説が追加されている。
9	0609-0613	トツカンvs 勤労商工会	高殿 円 早川書房 1,680円 (古1,010円)		国税の特別徴収官を扱った仕事系小説。「マルサの女」よりは実務的かつ日常描写が多い。この本はシリーズ2作目。1作目が見当たらなかったの先に購入。表題の通り中小企業を守る商工会の弁護士が行き過ぎた徴収方法を訴状に対決を仕掛ける。双方、裏に諸事情を抱えていて落としどころに興味を持たせるストーリーになっている。
10	0614-06XX	野性時代 2011年7月号	角川書店 680円		定期購読誌。毎月12日発売。柳広司のジョーカー・ゲーム最新作「帰還」を掲載。作品がひとつヒットすると二匹目、三匹目を狙うのは業界の常。「ジョーカー・ゲーム」は本来単行本一冊の短編集で終わりの予定だったが出版社が許さず2冊目の「ダブル・ジョーカー」に続く最新作の登場だ。今回は三国同盟締結前のドイツに敗れたフランスに潜入したD機関のスパイが主人公。フランスのレジスタンスの活動、ヨーロッパ戦線の分析・調査を行う中で三国同盟反対の報告をするも無視されフランスとも戦争状態に入るため空しく日本への帰還を余儀なくされる。相変わらず歴史考証は緻密だが説明っぽいところが多くシリーズの中では痛快さに欠ける。

11	0616-0625	短篇ベストコレクション 現代の小説 2011	日本文藝家 協会編 920円		たまには普段読まない作家でもと思って購入。掲載作家 ■ 浅田次郎、阿刀田高、伊集院静、伊野隆之、冲方丁、角田光代、今野敏、仙川環、高橋克彦、筒井康隆、橋本治、三崎亜記、道尾秀介、皆川博子、森絵都、森見登美彦、森村誠一、山田正紀 しかし、これが本当にベストの作品を選んだ結果なのかおおいに疑問。教科書に載っていた文学作品って結構引き込まれるものがあったがこの本の文学作品っぽいものはどうでもいいような事ばかりで退屈。もっといい作品はあったと思うのだが。
12	0617-06XX	小説すばる 2011年7月号	集英社 880円		定期購読誌。毎月17日発売。 東野圭吾の文壇ネタを扱った「黒笑小説」のシリーズになる「小説誌」、湊かなえの叙述ミステリーもの「白ゆき姫殺人事件」などを目玉作品として掲載。告白スタイルのミステリーは古典的な手法だが湊かなえによって新たに複雑化して定着したように思う。
13	0623-06XX	オール讀物 2011年7月号	文藝春秋社 1,000円		定期購読誌。毎月23日発売。 今月号の目玉は宮部みゆきの三島屋変調百物語の最新作「くりから御殿」と東野圭吾のガリレオシリーズ最新作「偽装(よそおう)」。 百物語は枚数も多く本当にこの調子で百話書き続けるつもりなのか驚きとともに考えてしまう。
14	0626-0630	夕映え天使	浅田次郎 新潮文庫 500円		ちょっとレトロな表紙に惹かれて購入。 本来、浅田次郎は嫌いな作家。著者の胡散臭さを除いてもどういう訳か作品にうそっぽいものを感じて普通の読者のようには泣けない。作品は終わりや旅立ちをテーマにある特別な一日の普通の出来事、日常生活に起こる特別な事件を扱った連作短編。「樹海の人」は著者の自衛隊生活における体験を基にしたもので作り物でないところに興味を惹いた。
15	0630-0704	儂い羊たちの祝宴	米澤穂信 新潮文庫 500円		華族社会の特殊な人間関係がもたらす事件を題材にした連作短編。退廃的かつ幻想文学の雰囲気を持つ作品。

16	0705-0710	夜	橋本治 集英社文庫 700円		<p>男はそれぞれの理由により、女のもとへ帰らなくなる。ある男は何年かを経て一度去った女のところに帰ってくる。最後の「暁闇」にはゲイの男が登場するが、共通して女の視点で男が描かれている。男が繰り返す浮気・不倫の理由、敢えて離婚せず日常生活を頑なにこなす妻の心情は作品からは不可解に感じるし納得できない。</p>
17	0712-0716	遊星ハグルマ装置	朱川湊人 笹公人 日本経済新聞 出版社 1,680円 (古1,010円)		<p>表紙は諸星大二郎。ハグルマ(歯車)のイメージは機械を連想するものでアナログっぽいと同時に妙にSFっぽい。笹公人は歌人で朱川湊人のレトロなエッセイ風のショートショートにコラボして交互の頁に短歌を載せている。題材が特別なだけに短歌の良しあしはよく分からないが異色の作品にはなっている。</p>
18	0712-07xx	野性時代 2011年8月号	角川書店 680円		<p>2011年4月より隔月連載の東野圭吾作品が目玉。今月号はナミヤ雑貨店シリーズの3作目「シビックで朝まで」を掲載。</p> <p>80年代「どんなことでも相談に応じます」と悩み相談を始めた店主の原点と店を畳む経緯を書いたもの。前2作品とも関連していて店を畳んだ後の30年後も店は存在し外のシャッターから手紙の形で過去の相談事が途切れなく続く。たまたま犯罪を犯した現代の三人組の若者が隠れ家にしたのを機に悩み相談を受け継ぐ事に。</p> <p>1作目「回答は牛乳箱に」 2作目「夜更けにハーモニカを」 ちょっとしたファンタジー小説で泣き所のある作品。</p>
19	0720-0727	奔る合戦屋	北沢秋 双葉社 1,575円 (古950円)		<p>「呷う合戦屋」に続いて発表された作品だが内容は前作より時代が遡って若き日の主人公を描いたもの。中信濃の豪族村上義清に仕えていた石堂一徹は類稀なる武と知略を以って家中で台頭してゆく。一方甲斐の武田との争いが熾烈となるにつれ一徹と主君村上義清の天下取り構想にずれが生じ始める。才あるものを使いこなせない主君の悲劇。一徹が主家を離れて合戦屋となる経緯。当時の戦力分布、合戦のあらましなどにも触れていて興味深く、清々しさと痛快感を含む作品。</p>